断章
旭川のアイヌ語地名研究
108
高橋 基

―ハルシナイから上流の地名⑰―

前回は、安政五年(一八五八年)に**掲載地図**のペンケアソナイ(現・神居第二線川)から山越えし、オンネナイ(現・神居第一線川)へ出た松浦武四郎が持参した野帳(フィールドノート)『午第一番』と、箱館奉行所に提出したこのペンケアソナイ山道の開削計画を紹介した。

松浦武四郎が、右の踏査後に箱館奉行所に提出した**写真①**の報文日誌「戊午登加知留宇知之日誌」(稿本)では、このペンケアソナイ山道は、右の二書とはかなりの差異が見られる。

写真②は、平成十八年四月十五日に、ペンケアソナイ山道を踏査した時のものである。報文日誌のパンケアソナイ山道の山越え日の三月二日(陽暦四月十五日)と同じ日に踏査した。昭和六十一年、平成四年に続いて三回目の山越え踏査で、登山家の丹野裕之氏に同行していただいた。堅雪の時期なので、最短距離で目的地に向かうことができた。松浦武四郎の通行ルートは、やはり『午第一番』に記載のものが正しいと断定できた。また、明治十九年竣工の「上川仮新道」(国道十二号の前身)のペンケアソナイ山道は、……線1のルートと推定した。

なお、当連載105で、**掲載地図**のアヌトウラシナイ(現・鱒取川)について、知里真志保の地名解を次のように紹介した。

アヌトゥラシナイ(anu-turasi-nay 我等・nay〈an-nu-turasi-nay 我等・よく・登って行く・沢)―雨竜郡の多度志(原名―tat-us-nay 樺・群生する・沢)へ越えて行くのにこの沢を登って行った。

知里真志保は、古老の伝承として、この沢を登って、山越えして多度志へ行く交通路としての川であると記録してくれた。

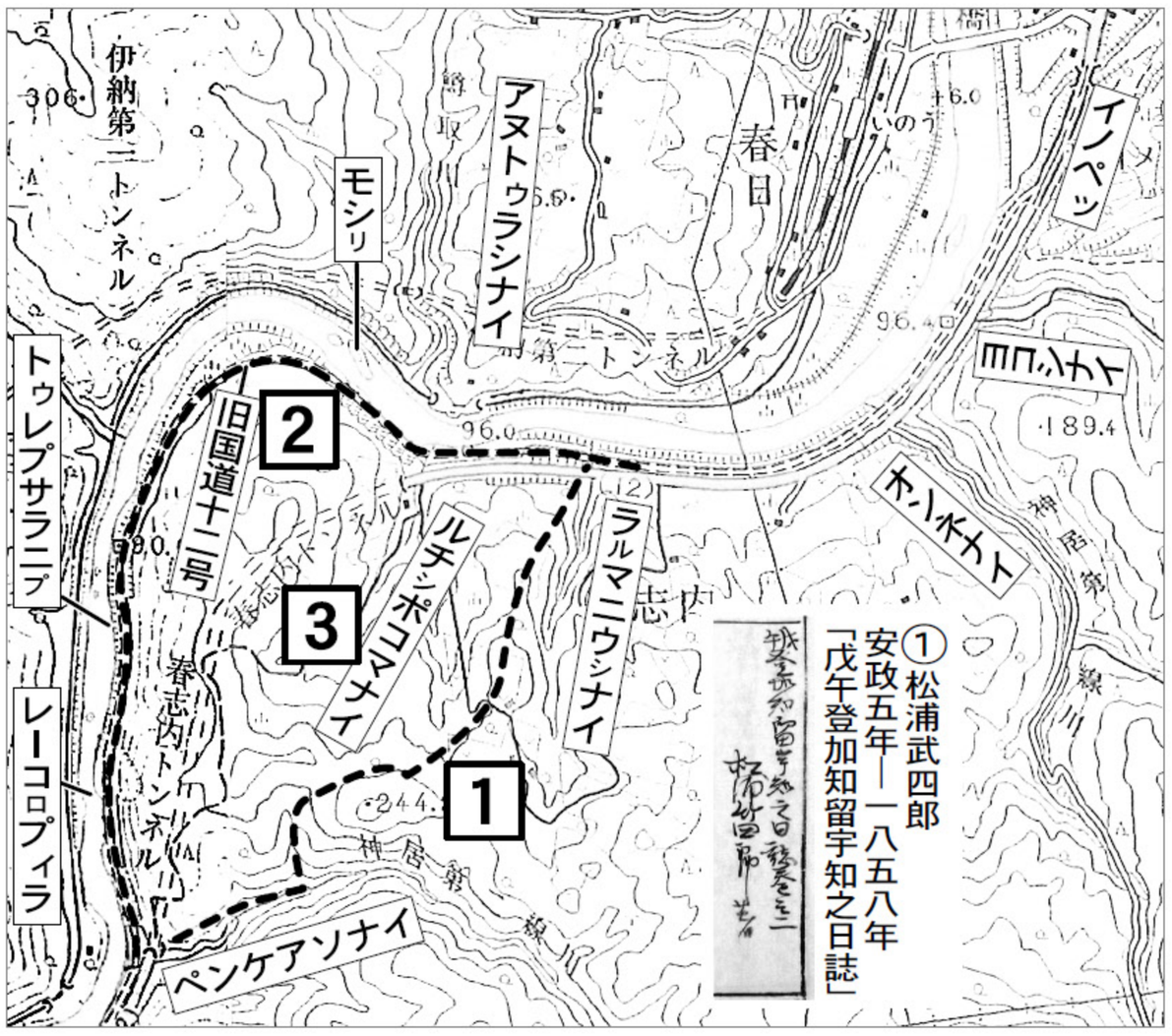
昭和六十一年に、このアヌトゥラシナイ(現・鱒取川)から多度志川への踏査を敢行した。

ところが、誤って山越えして、ホロナイ(現・納内幌内川)へ出てしまった。その最上流の農家で聞いた昔話では、「昔はこの川沿いに、よくアイヌの人たちが往来していましたよ」とのことであった。前号で紹介したように、文化四年(一八〇七)に近藤重蔵が、『蝦夷地図』に描いたホロナイ~エタンベツ~ピップへの「新道開可然筋」は、アイヌ古道として、大正時代まで続いていたことが判明した。偶然の踏査失敗から新発見をしたのであるが、踏査の必要性と聞き取りの重要性を、改めて再認識した次第である。

さて、それでは、明治十九年に開削された「上川仮新道」のペンケアソナイの山道は、樺戸集治監の囚徒により開削されたが、アイヌ古道を活用して、ルートを策定したのは誰であろうか。

それは、北海道庁初代長官・岩村通俊(みちとし)の命を受けた北海道庁土木課の高畑利宜(としよし)である。明治十九年時点で、高畑利宜が先に紹介した松浦武四郎の資料を見ることは不可能で、わずかに万延元年(一八六〇年)発刊の木版本『十勝日誌』にこのパンケアソナイ山道が記述されているが、そのまま、「上川仮新道」のパンケアソナイ山道とはならない。

高畑利宜は、開拓使使掌(しょう)であった明治五年に、札幌発着九十日余の上川調査をしている。その後も石狩川筋の調査に従事していた。その体験から、アイヌの人たちとの交流を通して、ペンケアソナイ山道を知り、明治十九年に……線1のペンケアソナイ山道が「上川仮新道」になった。しかし、山道で通行不便のために、明治二十二年五月には、……線2の「旧国道十二号」が開削され、「ペンケアソナイ山道」は、わずか三年で短い使命を閉じた。しかし、アイヌ古道の活用の事例として、長く記録に残しておきたい。



① 松浦武四郎
安政五年―一八五八年
「戊午登加知留宇知之日誌」

② ペンケアソナイ山道踏査

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します